

はじまり

三月十一日、あの地震が起きました。はじめの数日は自分たちの生活のことで手一杯でしたが、近くの小学校の給水所でお手伝いをしている同級生のことを知りました。その話を聞いて私も何かしなくてはと思い、近くのボランティアセンターに向かいました。

初めて行ったボランティアセンターは、自分の想像をはるかに超えるところでした。飛び交う情報。次々と来る仕事。誰も指名されるのを待ってはいませんでした。自分から名乗り出て、次々に助けを必要とされているところへ出掛けていきました。私も自分から申し出て仕事をもらいました。それは全国から送られてくる救援物資を仕分けする仕事でした。倉庫の天井まで積み上がっていた膨大な量の救援物資を、衣類や食料、毛布など種類ごとに仕分けしていきました。思ったよりも重労働でへとへとになりました。

でも、誰かの役に立ったかなという達成感から、明日も行きたいと思いました。二日目は、初日以上にへとへとになりました。手にまめができ、腰にもきました。三日目、疲れがかなり出てきて、休憩時間にぐったりしていました。



支援物資の仕分けをするボランティア

こんな大量の物資の仕分け、いつになったら終わるのかなと、ぼんやりと考えていました。そのとき、ボランティアセンターの責任者が話をしにきました。「ある避難所では、赤ちゃんの泣き声がひどかったらしい。でも、明け方には静かになっていたそうだ。ここにある毛布が届いて、暖めてあげられたら助かったかもしれないの……。この仕事は誰にもほめられないしお金なんかももらえない。けれど、君たちの行動で必ず誰かが救われるんだよ。」その言葉を聞いて、疲れは吹っ飛んでいきました。目の前に積み上げられている物資を早く仕分けしなければと黙々と作業に取り組みました。

あの時、被災者の人々に必要だったのは行動でした。行動だけが人々を救えたのです。そのことに気が付いてから、その後のボランティアの作業もあれこれ考えずに、まずはやろうと思えるようになりました。行動を起こさなければ何もはじまらない。それが今回のボランティア活動で私が得た教訓でした。

（青葉区 二年 生徒作文）

「考えてみましょう」

- ボランティアセンターの責任者の話を聞いた「私」はなぜ黙々と作業に取り組んだのだろうか。
- 私たち中学生ができるボランティア活動にはどんなことがあるだろうか。